

シンポジウム

「IBD 診療におけるカプセル内視鏡検査の最前線」

司会 久松 理一（杏林大学医学部消化器内科学）

渡辺 憲治（富山大学炎症性腸疾患内科）

日本のカプセル内視鏡の歴史はクローン病に対する試みから始まった。その後、パテンシーカプセルが導入されて検査の安全性が高まり、大腸用カプセル内視鏡は潰瘍性大腸炎にも試みられるようになった。現代の炎症性腸疾患は treat to target の診療戦略が推奨されているが、内科や外科治療とカプセル内視鏡検査の組み合わせ、各種バイオマーカーや画像検査との相補的な使い分けなど、IBD 診療におけるカプセル内視鏡の運用については多くの課題が残されている。本セッションではこうした炎症性腸疾患診療におけるカプセル内視鏡の残された課題、秘めたポテンシャルについて討議したい。新たな試みを含めて意欲的な演題を期待している。